

## 第七章 税理士事務所

### 税理士事務所開業と地域社会への提言

豊中市曾根のアパートを引き払い、郷里の滝野町に帰って、税理士登録を大阪府北支部から、兵庫県社支部やまに変更した。自宅の玄関土間に、机・椅子二卓を並べ、小さな木製の看板を出した。

税理士事務所開業のご挨拶を社支部の先輩税理士と知人に出した。当時、神戸銀行を退職し、兵庫県信用組合八千代支店長に転職していた父とともに、税理士の黒石一三先生の事務所に開業のご挨拶に上がった。事務所にお伺いして、大勢の事務員さんと、多くの書籍があることに感心した。税務の本ばかりでなく、いろいろな分野の本がうず高く積まれていた。

引き続き、当時、税理士会・社支部長であった土井康二郎先生の事務所にご挨拶に上がった。税理士の仕事に対する誇りと、凜とした態度に感銘した。

毎日、仕事もなく、本を読む日が続いた。全く営業活動をしない開店休業の町医者もどきの

生活の間に、「決算のご案内」「決算チェックリスト」「経営分析表」「資金運用分析表」などを作成した。

社会保険・労働保険関係の実務書をはじめ、法人登記に必要な各種議事録の作成、不動産取引に必要な宅地建物取引実務などを読んでいた。このまま田舎で税理士を開業するのであれば、守備範囲は広い方がよい。

私が関学以外で受けた研修では、天満の大阪産業経理協会の「原価計算と法人税務の講座」が印象に残っている。青木倫太郎先生ほか、関西の有名大学の会計の教授や、大阪国税局の中村審理係長などが講義を担当されていた。「天満一〇〇回」を合言葉に、地下鉄天満橋にあった協会の会館で夜間の研修を受けた。もともと企業人を対象にした講座であったが、学生でも受講できた。

これは受験勉強ではなかったが、ここで勉強した「原価計算基準仮案」の内容は興味深く、後に管理会計や経営分析実務の基本になった。法人税法の講座では、「法人税の決算調整と申告の手引」をテキストに、税法の考え方を根底から勉強し、法律、施行令、通達を関連させて読み、考える訓練ができた。

滝野町に帰ってしばらくして、父が自宅に隣接して事務所を建ててくれた。間口二間×奥行三十間の総二階建て木造事務所であった。一階は一部屋、二階は二部屋の、倉庫みたいな広い

事務所であった。父はどうして資金を工面したのか。大学進学から税理士になるまで、私の進路に一切、意見を述べることはなく、いつも見守ってくれていた。

二、三年すると、依頼者が少しずつ増えてきたが、ほとんどが個人の青色申告の決算・申告の依頼で、法人からの依頼などほとんどない。田舎で「私は法人専門です」では通用しない。仕方なく、所得税と相続税の実務書から、例題や申告書の記入例を丹念に研究した。将来に向け、「必要経費チェックリスト」「確定申告チェックリスト」「相続税のご案内」などを作成した。仕事がなく、暇な時代がなければ、これだけ実務の勉強はできなかったであろう。

この時期は、税理士会・社支部の青色申告指導を、後に、TKCの管理会計や、資金分析会計の講師を積極的に引き受けた。開業したのは高度成長期であったので、指導させていただいた個人事業者が次々と法人成りし、後に関与先になったところも多い。もともと商売人の子供ではないため、商売の感覚がない。大学の経営学の知識が役にたつことなど皆無に等しい。関与先の社長から教えられることが多く、毎日が驚きの連続であった。

今でもはつきり印象に残っているのは、「先生はしっかり儲けているか」「まあ、なんとか」「金儲けの方法や知識を教えてもらいたいから……」「もつと努力します」。

「社長の役員報酬はいくらに決めますか」「市長の給与以上にしたい」「そうですね」「私は同級生の中で一番高い報酬を目指して頑張ります」等々、「なるほどそうなのか」という類の会

話が多かったが、「そんな無茶なことではできません」「そんなことをするために税理士をしているわけではありません」とお断りしたこともあった。粉飾決算も逆粉飾決算もやがて身の破滅を招く。論理的に納得のできる仕事以外に手を出さないというスタンスは生涯続いた。堅苦しい税理士と思われていた。

地元の商工会の研修講師なども引き受け、簿記の指導はもちろん、経営学や、経営分析、資金運用分析などの講演もした。この頃のレジメが残っているが、私の講演が、どの程度皆さまにお役に立ったのか分からない。論理的で理屈っぽく、まるで会計士試験の回答のようであった。

当時は、「標準簡易簿記で青色申告」の時代で、商工会の指導もこれで行っていた。複式簿記とは程遠い簡易な方法で青色申告決算書を作成していた。こんな易しい仕事をするために税理士になったのでないが……と思わぬでもなかったが、ご依頼を受けた仕事を懸命にこなした。簡易簿記による所得税の確定申告をお引き受けしたのは短い期間で、原則として複式簿記による記帳を事務所の受託ベースにした。

このほか、将来、税理士業務に付随して登記業務をしたいと考え、天王寺の元村月美先生の「司法書士受験講座」を一年間受講した。民法と商法の基礎知識が涵養できた。後に、青色申告事業者の法人設立登記を何社か行ったが、「税理士の付随業務として登記はできない」とい

う民事局長通達を根拠に、地元の法務局の登記官から、「どなたか司法書士さんをお願いして下さい」と注意された。

開業して四年くらい経った頃に、地場産業最大手のDT商店から依頼を受けた。専務さんが関西学院の大学・大学院の先輩であった。神戸でご活躍のTさんからも依頼を受けた。専務が社高校の同級生であった。年商何億円単位の決算書を組み、何千万円、何百万円単位の税額計算ができるようになり、何回も、何回も検算・見直しをして完成した。

創業期の顧客さまには、今でも心から感謝している。こうして徐々に顧客さまが増え、女性事務員も二人になった。

四十六年五月に結婚した。妻は兵庫県立龍野高校を卒業して、明石のK会社で経理や社会保険の仕事をしていた。

新婚旅行は南九州へ、ところが、伊丹空港を定時に離陸した飛行機が、悪天候(雷)のため、福岡、宮崎、鹿児島、再び福岡空港を経由したが、どの空港にも着陸することができず、元の伊丹空港に戻って当日は宝塚ホテルに泊まることになった。

翌朝はやく目的地の鹿児島に向け出発した。伊丹空港発、伊丹空港行きのジェット機で、雲の上の九州一周旅行をすることになった。

四十七年二月から、五十二年一月までの間に三人の子どもを授かった。妻は、子育てと事務

所の補助者としてよく頑張ってくれた。

四十五年一月、小野青年会議所に入会。四十七年九月、宅地建物取引主任者登録。四十九年、TKC入会。五十一年四月行政書士登録をして、交際範囲の拡大、会計業務のコンピュータ化の推進、周辺業務の拡大に備えた。

開業後数年が過ぎ、税理士の仕事も増え、地域でも認められるようになった昭和五十年から五十五年までの間に、地元小野市、加東市の地方紙「新東播」の正月号などに毎年いろいろな提言を掲載した。いずれも当時の編集者から依頼されて書いた。若さと気力と勢いの四十代に書いた「私の提言」を原文のまま掲載したい。

昭和五十年代の時代背景や、地域の状況などが思い出され、その上、現在でも通用することも多く感無量である。※は後に付記した。

青年は夢とロマンを持って（新東播 昭和五十年一月一日）

現在の青年は、青年が本来失ってはならない夢とロマンと気概を失って諦めに満ちている。中学、高校大学と、当然の如く進学し、それから後も、就職、結婚、マイホーム、マイカーと何だか一定の定められたレールの上を、はつきりした目的意識もなく、無反省、無目的にトロッコの如く走っている。

これはゆとりを持って、分相応の線で、青年期を送ろうとする若者が激増しているところからも窺えるし、今後ますますこの傾向は進むかも知れない。青年は元来、夢と口マンと気概を持ち、新しい社会を築く大立役者であったのに。

今年には戦後三十年、数字の上でも一区切りとなる。昭和二十年八月まで、日本人の精神の退路は遮断されていた。二十九年経った昨年までの日本人も退却を知らぬ高度成長社会であった。しかし今や新しい時代がスタートした。

戦後の高度成長の担い手となり、われわれ青年に、教育と豊かさの環境を与えてくれた戦前・戦中の世代の労に報いるために、われわれ青年は、もっともつと精力的に遅くたち働かねばならない。時代の流れに自分自身の力量を調和させ、上手に世渡りする器用さは必要でない。青年は、失敗を恐れてはならない。また、初めから諦めてかかるのはいけない。青年の夢と口マンと大志が成就するや、徒労に終わるや否や、青年自身の努力と、能力と、気概と運が決定するところであって、常に、向上心、研究心、冒険心、野心を失わず、たくましく実践してみようではないか。

青年は、万一失敗したところで、自身による再起はもちろん、救ってくれる神さまもある。ありがたいことに、試行錯誤の中でやり直しが認められ、あるいは、宥赦してもらえ好環境が、新しい社会を築く基盤となるのである。

昭和五十年のスタートとともに、われわれ青年は、政治に、経済に、経営に、文化に、社会に、その夢とロマンと気概の一つひとつを具体化する努力を開始しよう。

あすの夢を行政に繁栄させるため、代表者や代弁者を議会へ送ろう。行政と定期的に会合を持って明るい豊かなまちづくりをもっと身近なものにしよう。

厳しい経済環境の年ではあるが、事業経営にひと味違う青年の気概を実践していこう。週休二日の青年は、余暇時間を十分活用して何かを始めよう。青年の夢とロマンと気概を持って、本物で確かな新しい時代をつくる住民運動を目指そう。

#### 次代に対する責任を（新東播 昭和五十一年一月一日）

戦後三十年、日本の変容は実にすさまじい。昭和二十年代、われわれは生存の維持を図るため、芋を求めて食を充たし、古い衣類を手直して暖をとった。それに続く三十年代、衣食住という人間の基本的環境は少しずつ充足されてはいったものの、やはり生活の向上に汲々としていた。それが四十年代の初めには、物質的欲望は一応充たされ、その外面的な復興ぶりは世界各国の注目の的となった。しかし、この高度成長に酔いしれている間に、われわれは大変なものも失っていることに気がついた。それは物質的な豊かさだけは、何とか充たされたものの、一方では精神的な豊かさを犠牲にしてきたことである。



われわれは、最近になってようやく、自らの幸福を、均衡のとれた形で、自らの手で守り増大していかねばならないことに気がついた。

二年を越える経済の減速は、規格大量生産・大量販売の従来の行き方に大きな反省を加えたすべての面で新しい秩序が組み立てられる。そんな時代がいまスタートしたのである。明るい豊かな住み良い郷土づくりも、この新しい秩序の上で構築されなければならない。私は、これは長期的には教育であり、短期的には住民主義行政の遂行だと考える。学歴偏重、受験勉強中心の教育から、人間味や、暖かさを教えるこれからの新しい教育に心から期待したい。

ところで、行政は、住民の支持を得て納得がゆき、愛着を感じさせるものでなければならぬ。この場合、一人ひとりの住民、つまり、個人の要望を充たすことだけが、住民主義行政に適合したものとは限らない。否むしろ、時にはたとえその個人住民にとっては不満足であっても、集団住民もしくは、その集団住民の多数をもって形成される地域社会の要望を十分満足させるものでなければならぬ。

これが本物で、確かな時代の流れを見誤らぬ識見を前提とした住民主義行政である。この住民主義行政を実現するため、われわれ住民一人ひとりが、まず行政（政治）に関心を持つことである。もっと直裁的には、首長や議員の活動を、監督することである。昨年の春聞いた、あの議員さん方の、公約の実行努力ぶりを、今一度点検してみようではないか。

議會制民主主義政治の行われる現在、われわれ個人の住民が地域の行政に参加出来るのは、この首長及び議員の選出と、その公約実行努力の監督であることをもつと真剣に考えてみようではないか。

われわれの郷土をわれわれ自身の手で守り、住民の希望や夢を実現して、正夢にしてゆく努力、それは現在に生きるわれわれ自身の次代に対する責任でもある。現在を背負うわれわれの問題意識こそがカギになる。

人間教育重点の高校に（新東播 昭和五十二年一月一日）

戦後生まれのニューファミリーの台頭と、オイルショックに始まった新しい時代に対応する明るいうたかな郷土づくりは、受験勉強中心の従来の詰め込み教育から、思いやりや温かみを教える新しい人間教育に負うところが大きい。

一方、二年続きの「大卒就職難」の教訓から、これまでの「何が何でも大学へ」という社会的風潮にブレキがかかり、いい大学を出て、いい職場に就職し、お金と名誉のある暮らしを求めるといふ出世主義のパターンがくずれ、カネや名誉よりも、自分の趣味にあつた暮らしをしたいという若者が増えてきた。

この「何が何でも大学へ」という単一的思考への反省は非常に望ましい事と考える。といっ

てもすべての若者にノンキャリアを勧めている訳ではない。能力と意欲のある者は大いに進學して勉強すればよい。

ただ「石を磨いても玉にならぬ。銅は磨いても銀にならぬ」ということが、もしもそのまま当てはまるのであれば、「玉にならずともよい。銀より光る銅ならそれもよい。どうせ人間二十歳すぎればただの人」、能力や意欲を別な方向に活かすことを考えてみる方が余ほど重要である。

大多数住民にとって重要なことは、知識の向上より、知恵の向上の方が必要なものであって、頭でかちの理屈屋より、温かみや人間味のある人、そんな人が多勢集まって真に住みよい豊かな郷土をつくっていくことが重要である。

何が何でも、という単一的風潮を戒める限り、その前段階としての高校教育が充実されていなければならない。進学重点校の一部で、大学進学を希望しない若者の人間教育までが、安易に行われてはならないのである。進学を前提としない人間教育重点校の卒業生が、地域社会の職場に一杯いて、それが人情細やかで潤いのある町をつくるのである。

ところで、杜高校滝野分校と東条分校を本校に統廃合する噂があるそうだが、これは断じて許してはならない。それは過去の実績からみてもそこには、立派な生徒と、よい先生が集まり、すばらしい人材を養成し、小規模ながら特徴ある校風を培養してきた実績を持っているからで

ある。

このことは人間教育の面からも、また、地域内公立高校への通学という面からも、大変重要なことであって、単に教育経費の合理化を理由に本校へ合併すればよいというものではない。滝野分校や東条分校を廃止すれば、早朝から、バスや電車で神戸までゆく生徒がそれだけ増えるのである。

人間形成に欠かせないクラブ活動は出来ないし、通学途中の非行も増えはせぬかと心配である。滝野分校は、従来の実績を活かし「商業家庭科」中心の女子高校に拡充・単立昇格をめざそう。東条分校は、本校、吉川高校とは一味違う「実業校」へ拡充単立昇格を考えよう。どちらにも進学重点とはせず、地域人材を養成する人間教育重点校をめざそうではないか。

※私の期待は実現することなく、両校はこの後、間もなく廃校となった。残念なことではあるが、時代の流れには逆らえなかった。しかしながら、私の期待した役割は杜高校（本校）が担うこととなり、現在では、近隣高校中では、ひと味違うよい校風の高等学校になっている。

バランスくずさないで（新東播 昭和五十三年一月一日）

小野加東の住民、とりわけ滝野町の住民にとって播磨内陸中央公園への期待は大きい。それ

は兵庫県の「緑の回廊計画」の一環として、当地に偉大な文化社会が建設されることへの期待であると同時に、地域の観光振興と大きなかわり合いをもつからである。

滝野町の基本構想では、この中央公園建設にまつわる利用客の流入を地域の振興に結びつけるものであるが、それとはまた別の視点から、地域住民の赤裸々な素直な気持として、公共投資による新しい文化や景観の創造と、民間資本による商業観光との違い、造られていく新しい景観、従来からの古い景観等々について、今後の方向を考えてみたい。

第一に、県の「緑の回廊計画」というすばらしい計画の場所に当地が選ばれたことに感謝しなければなるまい。しかしながら、文化社会の建設という偉大な計画は、心や生活のゆとりから生まれるのであって、決して施設の完成とともに生まれるものではない。本年は野外ステージ、芝生広場が一部オープンする予定と聞くが、道路網が十分整備出来ないまま、最高一万数千人も収容出来るホールを開放するのはどうかとためらう。

私はまず初めは、近隣住民と本当の公徳心を身につけた真の愛好者にだけ施設を開放し、除々に、その施設を道路や駐車場の完成とともにバランスを保ちながら開放してほしいと願っている。

この公園は、幟を立て、宣伝をし、派手な呼び込みをする商業観光とは全く趣を異にするも

のであることを十分理解してほしい。これでこそ、十年先、二十年先、さらに二十一世紀へと続く新しい文化と景観が創造され、明るい豊かなまちがこの地に育っていくと考えられるからである。

次に私は、「鬮流灘」のような比較的小規模、かつ自然そのものを母胎とする景観は、地域住民が、心の交歓の広場として利用することから開発を進めて欲しいと願っている。そのためにはまず、鬮流灘に架かる錦雲橋までの小さな板の橋を鋼鉄製として、危険箇所にはすべて手すりをつけ、自然を損なわない程度に小さな遊歩道を広範囲に走らせ、ところどころに固定式ベンチを取り付けることを提案したい。

鬮流灘は、少なくとも現在では、どこにでもある里山や小川と同じ心やすさで、地域住民の心がやすらぎ、くつろぐことが出来、のびのび出来る住民広場にして欲しいと願うからである。中央公園と鬮流灘を一体とする大公園計画は、この計画の完成と、加古川線の複線電化という難問題の解決とともに、たとえ牛歩の如くでもよい、除々に、そして着実に、たゆみなく、その実現への努力を継続してゆかなければならない。

中央公園の施設も、鬮流灘の奇岩怪石も、行列して楽しむものでも、見るものでもない。それは、ゆつくりとくつろいで楽しむ「こころのひろば」である。我が郷土の明日を担う地域の為政者に、この夢と期待と願いを託したい。

※播磨内陸中央公園は、その後、播磨中央公園と名称が変更され、整備が進み、加古川線の電化も実現した。三十数年まえに私が願った理想の県民公園になったことは嬉しい。闘流灘の奇岩怪石は大きな開発もなく、地域住民のいこいの場として利用されている。

青年よ 闘志持て（新東播 昭和五十四年一月十五日）

「春風や闘志抱きて丘に立つ（虚子）」これは大学で会計学を教わった恩師青木倫太郎先生がわれわれ学生に与えられた激励の句であり、先生の座右の銘であった。

先生はまた「かくれたる闘志」不断の努力」「やさしい人柄」の三つの言葉で青年の理想を説かれた。学校卒業以来十余年たった今日、平凡な一市民となって昭和五十四年の新春を迎え、静かに先生の教えを思い起こしている。

ところで、現在のわれわれ青年に一番欠けているもの、それはまさしく闘志であり、努力であり、柔和ではないだろうか。すぐに妥協する。物わかりがよい。ええカッコしたがる。その実、たいした闘志も持ち合わせていないし、努力もしない。毎日の生活が何だか柔和さに欠ける私自身への深い反省をこめて黙慮してみると本当にびったりの感がする。十余年前の先生の教えから受けたあの感動は、一体どこへ消え失せたのか。

青年が、闘志と努力と柔和を失うとき、それはもう青年ではない。二十歳から四十歳までと

いう若さゆえに期待される人間群団青年、その青年こそ、常に夢とロマンを求め、無限の可能性へ挑戦し、闘志を發揮して、この期待に応えなければならない。

かくれたる闘志を持つて、不断の努力を重ね、柔和な人柄を心掛けることにより、あらゆる方面で、行動を起こさなければならぬ。青年各人が求める夢とロマンも、団体やグループで考える夢とロマンも、それがいざれであつても行動で示される限り、青年が青年らしく生きる最も大切なものであり、大勢の人々から真に期待されていることであろう。

帰省中の青年に訴える（新東播 昭和五十五年一月一日）

最近の上級学校への進学率向上という社会的傾向は、郷土の青年達を大都会へ送り出している。土地つき、家つき、両親つきの長男だけが進学を断念し、家業を継ぐ風潮も今や少なくなつた。自分の能力にあつた学校に進み、高度な知識と都会生活の経験を積むことは、現代人として必要なことも知れない。

といつても、学校など出なくても、立派な経営者や人格者のあることは事実だし、十分可能でもある。ただひとり、現代の社会的風潮に逆らつてノンキャリアでいることもないであろう。

在郷の青年の一人として考えることは、都会へ出て勉学を終えた、あるいは一定年限の就業を終えた青年を、そこに永住させる前に、もう一度リターンさせられないものだろうか。能力



と体力のある者は、そのまま都会に残って成功するそれは結構。ただ当然の如く都会に職を得て永住する前に、もう一度郷土のよさとその発展を考えてみてほしいということである。

もちろん、彼らに郷土へ帰って来いと提案するためには、彼らにそれだけの魅力を感じさせるだけの街づくり、環境づくりが急務である。なかでも衣食住などという人間の基本的な生活環境は、現在の少ないといわれる収入においてさえ都会移住者より余ほど恵まれている。

郷土にないのは彼らの能力と経験を生かして生き甲斐を与え、相応の報酬が得られる職場の環境である。現状では教員、地方公務員、それにごく少数の大企業の在郷支店や、地元大手企業ぐらいいしか就業の機会がないのが問題なのである。彼らをリターンさせるには在郷の事業所が、彼らを受け入れる能力と、容量をもつ企業に成長しなければならないし、また都会から優良事業所を誘致し新しい産業を興すのも一案である。

彼らに働く意欲をもたせ、夢と希望を与えらるとともに、青年諸君もまた、在郷の事業所に就業し、あるいは、郷土で事業を興すことを考えてみることである。

青年諸君、正月の帰省を機会に緑の郷土、土の香の郷土を見直してみようではないか。君達にとって郷土は、必ずしも都会の大企業従業員を育てるための「肥育牧場」ではなかったのだから。

※この提案に対する私の主張はことごとく裏切られている。地方の青年の多くは都市部に移

り住み、都市部に勤務している。郷土に帰って新しい事業を起す人は少ない。これは日本全国で起こっている現象であり、人口の都市集中と、地方の高齢化率を著しく高めている。都市集中を排し、地方を活性化して地方に雇用の機会を設け、人口移動の流れを大きく変えないことには、この国の将来は危うい。

※「一事いちじに十年」と言う。これは私の簿記の先生で「複式簿記発生史の研究」で有名な小島先生から教えていただいた言葉である。一つの仕事を十年間続けることができれば、その仕事で生涯、生活が維持できるという意味である。

自分で選んだ税理士という仕事を天職と心得え、ひたすら愚直に仕事に取り組んできたおかげで、開業後十年余りで顧客さまも増え、ようやくこの仕事で生涯、喰っていきける自信がついてきた（播州平野の人は、生活していくことを「喰っていく」と言う。今ではあまり使わないが、年配の人は戦後二十年経ってもこの言葉を使っていた）。

小野高校PTAの監事をしていたとき、当時校長であった藤江先生の前任地であった兵庫県立香住高等学校水産科の実習船に、乗船して香住港を周遊させていただいた。このときの感想などを近畿税理士会の会報に書いた。税理士会の会報に投稿したのは、左の一編のみである。

過剰なる競争 (近畿税理士界会・会報 平成四年十一月五日)

兵庫県立香住高等学校水産科の小型実習船「しりうす」(十九トン)に乗船する機会を得た。この小さな漁船の狭い操舵室の中に搭載されているリーダーや魚群探知機その他のハイテク機器の操作を見学して、近代的コンピュータ漁法のすばらしさにおどろくとも、「こんなことをして魚をとればいまに香住沖からカニやイカがいなくなるのでは」と変な心配をした。また、同校には、大型実習船「但州丸」(四四〇トン)があり、県下各地から集まってきた高校生が効率性の高い底引き漁業やマグロの捕獲を世界の海で学んでいる。

ところで、広く市場をみまわしてみると、あまり実用的な機能をもつとは思われない小品が多く出まわっている。また、たとえ重要な代物であっても、矢鱈と品種が多く、余計な機能が一杯ついている。なぜこんなにまで競争をして、顧客志向ベッタリで身のまわりを便利にしなければならぬのか、私には理解し難い。

人間が豊かな暮らしをしたいという欲望をこえて、市場が過剰なる競争をしまくっていると思えてならないのである。市場の競争という名の歯車の回転をもう少しスロウダウンさせなければならぬ。今まで急速回転してきた日本の経済の物財の豊富さを求めて突っ走ってきた効率至上主義が、農業、漁業、工業生産等のあらゆる分野で非難され、国際摩擦を起こしていることからこのことは明らかである。

今回の不況も、元はといえば、銀行が本来の健全な金融業務の何たるかを忘れ、質屋営業同然に、土地を担保に野放図な融資を続け、その結果、信用が過度に膨張して、株価と地価が上昇したことに始まる。

人々は超楽観的予想のもとに「浮かれ消費」に走り・ぜいたくを求め、海外旅行をし、グルメを楽しんだ。だがしかし、行き過ぎた快樂追求は、バブルの崩壊となり、不況を招いた。過剰なる競争に加え、倫理が麻痺して、政治・経済、社会の各分野で混乱を起こしたのである。要するに、行き過ぎた競争と倫理のないのはダメなのである。

また、今回の不況で、証券金融不祥事が発覚して、ズルズルと株価が下がり、証券市場や金融システムが壊れていったとき、私は市場経済において、「どんなことがあっても、壊してならないものが壊れていく」と危惧の念を禁じ得なかった。特に、今回の不祥事は名もない中小零細企業というより、名門大企業を巻き込んで起こってきた。一流は一流の、リーダーはリーダーの倫理を発揮すべきであったのである。

ここで何が倫理かと突っ込んで論じる余裕はないが、常に現実的対応で絶対的正義感のないわれわれ日本人にとって、倫理も左程難しく考えなくとも、そのアウトライン位は理解できる。昔から神様は教えている。「悪いことをしてはならない」と。要は強力な意志を持って、倫理を实践するかしないかである。



近畿税理士会・社支部長時代

自由経済社会の市場志向型経済は、長期的繁栄を築く二十世紀の結論であるとしても、やみくもの競争を前提にしていない。いま市場に必要なことは、過剰なる競争を排し、倫理を發揮して、あらゆる面でバランス感覚を磨き、コントロールの技術をしつかり学んで、市場経済の基本の型をつくることである、これで政治も経済も社会も安泰なのである。

※私が言いたかったのは、市場主義経済の背景にある行き過ぎた利己主義や利那主義、唯物主義を見直さなければならぬということである。そのため  
に、過剰なる競争を排し、倫理を發揮して、市場主義経済の  
基本の型をつくらなければならないということである。

近畿税理士会・社支部の業務研修講師を務め、多くのレジメを作成したが、多くは、法人税や、財務会計の当面の課題であった。

「日本の税制」（研修レジメ、平成十四年七月五日）は、近畿税理士会・公開寄付講座「日本の財政と税制」（大阪大学・経済学部）を四年間受講し、その結果をまとめたものであるが、「税制のあり方を税理士の立場でどう考えるか」につい



西村勝彦会計事務所

てよい研修になった。

現在までに、税理士業務に関連して就任した公職は、滝野町代表監査委員（昭和六十一年五月～平成十八年三月）、加東市代表監査委員（平成十八年三月～現在）、社会福祉法人滝野町社会福祉協議会監事（平成六年四月～十八年四月）、社会福祉法人加東市社会福祉協議会監事（平成十八年四月～現在）、財団法人加東文化振興財団監事（平成十八年五月～現在）などであるが、本業とする企業会計ばかりでなく、地方自治体会計、地方公営企業法会計、社会福祉法人会計、公益法人会計の各分野の研修会などに参加し、その都度小論を書いてきた。社会福祉協議会の事業や会計には、随分関心を持って取り組んだが、社会福祉に関する小論は書いていない。私には大きくて難しい

テーマである。

税理士会の業界活動では、近畿税理士会・社支部の幹事を経て、社支部長を平成五年四月から一期二年間、十五年四月から一期二年間の二回務めた。その他、兵庫県西税理士協同組合の

監事を十二年四月から一期二年間務めた。

昭和五十六年六月、駐車場がなく、不便であった自宅隣接の事務所を、現在地に新築、移転した。平成十二年、長女明子が税理士試験に合格し、十四年、税理士登録をした。

※近畿税理士会表彰規定により、本会の役員、部員、委員、支部長、副支部長として通算十年以上在職し本会の発展に功労があった者の表彰（八年六月）と、税理士業務に三十年以上従事し、本会の発展に寄与した者の表彰を受けた（十一年六月）。